

小栗虫太郎 本々

日本推理小説大

小栗虫太郎 木々高太郎集

日本推理小説大系 5 東都書房

日本推理小説大系第5巻

小栗虫太郎 木々高太郎集

定価三八〇円

著者 小栗虫太郎 木々高太郎

発行者 西村俊成

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

発行所 東都書房

東京都文京区音羽町三丁目一九

電話 東京(九四一)三一一一

振替 東京 七二七三三二

落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三十六年四月二〇日第一刷



目次

小栗虫太郎

黒死館殺人事件⁵

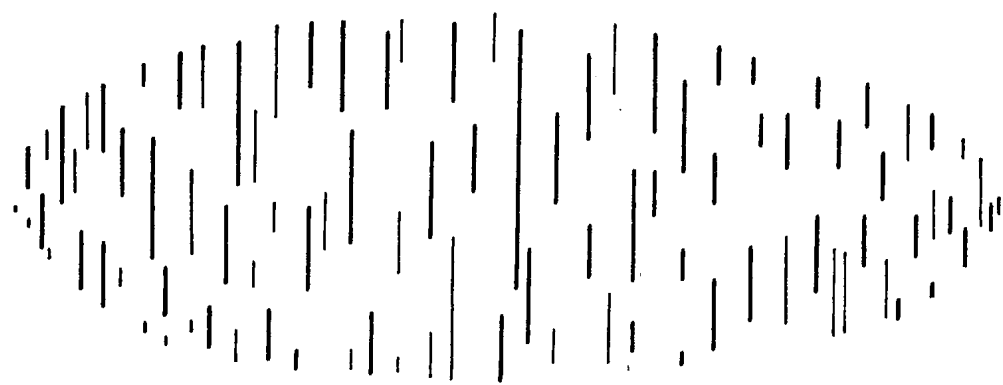
完全犯罪¹⁷⁶

木々高太郎

人生の阿呆²⁰⁷

網膜脈視症²⁸³

解説 荒正人²⁹³



小栗虫太郎

黒死館殺人事件

序篇 降矢木一族釈義

聖アレキセイ寺院の殺人事件に法水が解決を公表しなかったもので、そろそろ迷宮入りの噂が立ち始めた十日目のこと、その日から捜査関係の主脳部は、ラザレフ殺害者の追求を放棄しなければならなくなった。と云うのは、四百年の昔から纏綿としていて、白杵耶蘇会神学林以来の神聖家族と云われる降矢木の館に、突如真黒い風みtainな毒殺者の彷徨が始まったからであつた。その、通称黒死館と呼ばれる降矢木の館には、何時か必ずこういう不思議な恐怖が起らずにはまいいと噂されていた。勿論そういう臆測を生むに就いては、ボスフォラス以東に唯一つしかないと云われる降矢木家の建物で、明らかに重大な理由の一つとなつてゐるのだつた。その豪壯を極めたケルト・ルネサンス式の城館

を見慣れた今日でさえも、尖塔や櫓の稜線から来る奇異な感覚——まるでマッケイの古めかしい地理本の挿画でも見るような感じは、何日になつても変らないのである。けれども、明治十八年建設当初に、河鍋暁斎や落合芳幾をしてこの館の点晴に竜宮の乙姫を描かせた程の綺びやかな眩惑は、その後星の移ると共に薄らいでしまった。今日では、建物も人も、そういう幼稚な空想の断片ではなくなつてゐるのだ。恰度天然の変色が、荒れ寂びれた斑を作りながら石面を蝕んで行くように、何時とはなく、この館を包み始めた狭霧のようなものがあつた。そうして、やがては館全体を朧気な秘密の塊りとしか見せなくなつたのであるが、その妖気のようなものと云うのは、実を云うと、館の内部に積り重なつて行つた謎の数々にあつたので、勿論あのプロヴァンス城壁を模したと云われる、周囲の壁廊ではなかつたのだ。事実、建設以来三度に渉つて、怪奇な死の連鎖を思わせる動機不明の変死事件があり、それに加えて、当主旗太郎以外の家族の中に、門外不出の絃楽四重奏団を形成してゐる四人の異国人がいて、その人達が、揺籃の頃から四十年も永い間、館から外へは一步も出ずにいると云つたら……、そういう伝え聞きの尾に鱗が附いて、それが黒死館の本体の前で、鉛色をした蒸気の壁のように立ちはだかつてしまふのだった。全く、人も建物も腐朽し切つていて、それが大きな癌のような形で覗かれたのかも知れない。それであるからし

て、そういった史学上珍重すべき家系を、遺伝学的の見地から見たとすれば、或は奇妙な形をした輩のように見えもするだろうし、また、故人降矢木算哲博士の神秘的な性格から推して、現在の異様な家族関係を考えると、今度は不気味な魔寺のようにも思われて来るのだった。勿論それ等のどの一つも、臆測が生んだ幻視に過ぎないのであるが、その中に唯一つだけ、今にも秘密の調和を破るものがありそうな、妙に不安定な空気のある事だけは確かだつた。その悪疫のような空気は、明治三十五年に第二の変死事件が起つた折から萌し始めたもので、それが、十月程前に算哲博士が奇怪な自殺を遂げてからと云うものは——後継者旗太郎が十七の年少なものと、また一つには支柱を失つたと云う観念も手伝つたのである——一層大きな亀裂になつたかのように思われて来た。そして、もし人間の心の中に悪魔が住んでゐるものとしたら、その亀裂の中から、残つた人達を犯罪の底に引き摺り込んででも行きそう——思いもつかぬ自壊作用が起りそうな怖を、世の人達は次第に濃く感じ始めて来た。けれども、予期に反して、降矢木一族の表面には沼気程の泡一つ立たなかつたのだが、恐らくそれと云うのも、その瘴気のような空気が、未だ飽和点に達しなかつたからであらうか。否、その時既に水底では、静穏な水面とは反対に、暗黒の地下流に注ぐ大きな瀑布が始まつてゐたのだ。そして、その間に鬱積して行つたものが、突如凄じく吹き

しく嵐と化して、聖家族の一人一人に血行を停

えた。

めて行こうとした。しかも、その事件には驚くべき深さと神秘とがあつて、法水麟太郎はそれがために、狡智極まる犯人以外にも、既に生存の世界から去っている人々とも闘わねばならなかったのである。所で、事件の開幕に當つて、筆者は法水の手許に集められている、黒死館に就いての驚くべき調査資料の事を記さねばならない。それは、中世楽器や福音書写本、それに古代時計に関する彼の偏奇な趣味が端緒となつたものであるが、その——恐らく外部からは手を尽し得る限りと思われる集成には、検事が思わず嘆声を発し、啞然となつたのも無理ではなかった。しかも、その瘦身の努力を見ても、既に法水自身が、水底の轟に耳を傾けていた一人だった事は、明らかであると思う。

その日——一月二十八日の朝。生来余り健康でない法水は、あの雲の払曉に起つた事件の疲労から、全然恢復するまでになつていなかった。それなので、訪れた支倉検事から殺人と云う話を聴くと、ああまたか——と云う風な厭な顔をしたが、

「所が法水君、それが降矢木家なんだよ。しかも、第一提琴奏者のグレーテ・ダンネベルグ夫人が毒殺されたのだ」と云つた後の、検事の瞳に映つた法水の顔には、俄かに満更でもなさそうな輝きが現われていた。然し、法水はそう聴くと不意に立つて書齋に入つたが、間もなく一抱えの書物を運んで来て、どかんと尻を据

「悠くりしようよ、支倉君、あの、日本で一番

不思議な一族に殺人事件が起つたのだとしたら、どうせ一二時間は、予備知識に費るものと思わなけりやならんよ。大体、いつぞやのケンネル殺人事件——あれでは、支那古代陶器が單なる装飾物に過ぎなかつた。所が今度は、算哲博士が死蔵している、カロリング朝以来の工芸品だ。その中に、或はボルジアの壺がないとは云われまい。然し、福音書の写本などは一見して判るものじゃないから……」と云つて、「一四一四年聖ガル寺発掘記」の他二冊を脇に取り除け、繪子と尚武革を斜めに貼り混ぜた美々しい装幀の一冊を突き出すと、

「紋章学!？」と検事は呆れたように叫んだ。

「ウン、寺門義道の『紋章学秘録』さ。そう稀観本になつてゐるんだがね。所で君は、こういう奇妙な紋章を今まで見たことがあるだろうか」と法水が指先で突いたのは、DFCOの四字を二十八葉櫛冠で包んである不思議な図案だった。

「これが、天正遣欧使の一人——千々石清左衛門直員から始まつてゐる、降矢木家の紋章なんだよ。何故、豊後王普蘭師可怙・休庵(大友宗麟)の花押を中にして、それを、フイレンツェ大公国の市表章旗の一部が包んでゐるのだから。とにかく下の註釈を読んで見給え」

——「クラウジオ・アクワビバ(耶穌会會長)回想録」中の、ドン・ミカエル(千々石

の事)よりジェンナロ・コルバルタ(ヴェニ

スの玻璃工)に送れる文。(前略)その日バタリヤ僧院の神父ヴェレリオは余を聖餐式に招きたれど、姿を現わさざれば不審に思ひいたる折柄、扉を排して丈高き騎士現われたり、見るに、バロッサ寺領騎士の印章を佩け、雷の如き眼を睜けて云う。フランチェスコ大公妃カベルロ・ビアンカ殿は、ピサ・メデイチ家に於て貴下の胤を秘かに生めり。その女兒に黒奴の乳母をつけ、刈込垣の外に待たせ置きたれば受け取られよ——と。余は、駭けるも心中覚えある事なれば、その旨を承じて騎士を去らしむ。それより悔改をなし、贖罪符をうけて僧院を去れるも、帰途船中黒奴はゴアにて死し、嬰兒はすぐせと名付けて降矢木の家を創しぬ。されど帰国後吾が心には妄想散乱し、天主、吾れを責むる誘惑の障礙を滅し給えりと覚えぬ。(以下略)

「つまり、降矢木の血系が、カテリナ・ディ・メデイチの隠し子と云われるカベルロ・ビアンカから始まつてゐると云う事なんだが、その母子が揃つて、怖ろしい惨虐性犯罪者と来ている。カテリナは有名な近親殺害者で、おまけに聖バーセルミウ斎日の虐殺を指導した発頭人なんだし、また娘の方は、毒のルクレチア・ボルジアから百年後に出現し、これは長剣の暗殺者と謳われたものだ。所が、その十三世目になると、算哲という異様な人物が現われたのだ」と法水は、更にその本の末尾に挟んであ

る、一葉の写真と外紙の切抜を取り出したが、検事は何度も時計を出し入れしながら、

「お蔭で、天正遣欧使の事は大分明るくなったがね。然し、四百年後に起った殺人事件と祖先の血との間に、一体どういう関係があるのだね。成程不道德という点では、史学も、法医学と遺伝学と共通してはいるが……」

「成程、とかく法律家は、詩に簡条を附けたがるからね」と法水は検事の皮肉に苦笑したが、「だが、例証がない事もないさ。シャルコーの随想の中には、ケルンで、兄が弟に祖先は悪魔を退治した聖ゲオルグだと戯談を云ったばかりに、尼僧の隣口をきいた下女をその弟が殺してしまった——と云う記録が載っている。また、フィリップ三世が巴里中の癲患者を焚殺したという事蹟を聞いて、六代後の落魄したベルトランが、今度は花柳病者に同じ事をやるうとしたそうだ。それを、血系意識から起る帝王性妄想と、シャルコーが定義を附けているんだよ」と云って、眼で眼前のものを見よとばかりに、検事を促した。

写真は、自殺記事に挿入されたものらしい算哲博士で、胸衣の一番下の釦を隠す程に長い白髭を垂れ、魂の苦患が心の底で燃え燃えているかのような、憂鬱そうな顔付の老人であるが、検事の視線は、最初から一枚の外紙の方に奪われていた。それは、一八五二年六月四日発行の「マンチエスター郵報」紙で、日本医学生、聖リューク療養所より追放される——という標題の

下に、ヨーク駐在員発の小記事に過ぎなかった。が、内容には、思わず眼を瞠らしむるものがあった。

——ブラウンシュワイク普通学校より受託の日本医学生降矢木鯉吉(算哲の前名)は、予てよりリチャード・バートン輩と交りて注目を惹ける折柄、エクスター教区監督を誹謗し、目下狂否の論争中なる、法術士ロナルド・クインシイと懇ろにせしため、本日原籍校に差し戻されたり。然るに、クインシイは不審にも巨額の金貨を所持し、それを追及されたる結果、彼の秘蔵に係わる、ブーレ手写のウィチダス呪法典、バルデマール一世触療呪文集、希伯来語手写本猶太秘教義法(神秘教理術としてノタリク、テムツの諸法を含む)、ヘンリー・クラムメルの神靈手書法、編者不明の拉典語手写本加勒底亞五芒星招妖術、並びに榮光の手(緩首人の掌を酢漬けにして乾燥したもの)を、降矢木に譲渡したる旨を告白せり。

読み終った検事に、法水は興奮した口調を投じた。

「すると、僕だけという事になるね。これを手に入れたばかりに、算哲博士と古代呪法との因縁を知っているのは、いや、真実怖ろしい事なんだよ。もし、ウィチダス呪法典が黒死館の何処かに残されているとしたら、犯人の外に、もう一人僕等の敵が殖えてしまふのだからね」「そりゃまた何故だい。魔法本と降矢木に一体

何が？」

「ワラダス呪法典は所謂技巧呪術で、今日の正確科学を、呪咀と邪悪の衣で包んだものと云われているからだ。元来ウィチダスという人は、亜刺比亜・希臘の科学を呼称したシルヴェスター二十十三使徒の一人なんだ。所が、無謀にもその一派は羅馬教会に大啓蒙運動を起した。で、結局十二人は異端焚殺に逢ってしまったのだが、ウィチダスのみは秘かに遁れ、この大技巧呪術書を完成したと伝えられている。それが後年になって、ボッカネグロの築城術やヴォーパンの攻城法、また、デイヤクロウサアの魔鏡術やカリオストロの鍊金術、それに、ポッチゲルの磁器製造法からホーヘンハイムやグラハムの治療医学にまで素因をなしている」と云われているのだから、驚くべきじゃないか。また、猶太秘教義法からは、四百二十の暗号がつくると云うけれども、それ以外のものは所謂純正呪術であって、荒唐無稽も極まった代物ばかりなんだ。だから支倉君、僕等が真実怖れているのは、ウィチダス呪法典の一つのみと云っているのさ」

果して、この予測は後段に事実となって現われたけれども、その時はまだ、検事の神経に深く触れたものではなく、法水が着換えに隣室へ立つあいだ次の一冊を取り上げ、折った個所のある頁を開いた。それは、明治十九年二月九日発行の東京新誌第四一三号で、「当世零保久礼博士」と題した田鳥象二(陸多道士)「花柳(事情)などの著者」の戯文

だった。

——切も此度転沛通手行、聞いてもくねえ(と定句十数列の後に、次の漢文が挿入されている)近來大山街道に見物客系を引くは、神奈川県高座郡葦刈の在に、菫宮の如き西洋城廓出現せるがためなり。そは長崎の大分限降矢木鯉吉の建造に係るものにして、いざその由来を説かん。先に鯉吉は、小島郷療養所に於いて和蘭軍医メーデルフォルトの指導をうけ、明治三年一家東京に移るや、渡独して、まずブラウンシュワイク普通医学校に学び。その後柏林大学に転じて、研鑽八カ年の後二つの学位をうけ、本年初頭帰朝の予定となりしも、それに先き立ち、二年前英人技師クロード・ディグスビーを派遣して、既記の地に本邦未曾有とも云う大西洋建築を起工せり。と云うは一つに、彼地にて娶りし仏蘭西ブザンソンの人、テレーズ・シニョレに餓ける引手箱なりと云う。即ち、地域はサヴルーズ谷を模し、本館はテレーズの生家トレヴィエユ荘の城館を写し、以て懐郷の念を絶たんがためなりとぞ。さるにしても、此程帰国の船中蘭貢に於いて、テレーズが再帰熱にて死去したるは哀れと云うべく、また、皮肉家大島文学博士がこの館を指し、中世堡樓の屋根までも斜いで黒死病死者を詰め込みしと伝えらるる、プロヴィンシア繞壁模倣を種に、黒死館と嘲りしこそ可笑しと云うべし——。

て再び現われた。が、またも椅子深く腰を埋めて、折から執拗に鳴り続ける、電話の鈴に眉を蹙めた。

「あれは多分熊城の督促だろうがね。死体は逃げっこないのだから、まず悠くりするとしてだ。そこで、その後に起った三つの変死事件と、未だに解し難い謎とされている算哲博士の行状を、君に話すしよう。帰国後の算哲博士は、日本の大学からも神経病学と薬理学とで二つの学位をうけたのだが、教授生活には入らず、黙々として隠遁的な独身生活を始めたものだ。此処で、僕等が何より注目しなければならぬのは、博士が唯の一日も黒死館に住まなかつたこと、云うばかりか、明治二十三年には、僅か五年しか経たない館の内部に大改修を施したと云う事で、つまり、ディグスビーの設計を根本から修正してしまつたのだ。そうして、自分は寛永寺裏に邸宅を構えて、黒死館には弟の伝次郎夫妻を住わせたのだが、その後の博士は、自殺するまでの四十余年を殆ど無風のうちに過したと云つてよかつた。著述ですら『テュールドル家蠱毒並びに犯罪に関する考察』一篇のみで、学界に於ける存在と云つたら、まずその全部が、あの有名な八木沢医学博士との論争に尽きると云つても過言ではないだろう。それはこゝうなのだ。明治二十一年に頭蓋蠱模倣部及顛顛窩畸形者の犯罪素質遺伝説を八木沢博士が唱えたと、それに算哲博士が駁説を挙げて、その後一年に渉る大論争を惹き起したのだが、結局人間

を栽培する実験遺伝学と云う極端な結論に行き着いてしまつて、その成行に片唾を嚙ませた矢先だった。不思議な事には、二人の間にまるで默契でも成り立つたかのように、その対立が突如不自然極まる消失を遂げてしまつたのだよ。所が、この論争とは聯関のない事だが、算哲博士のいない黒死館には、相次いで奇怪な変死事件が起つたのだ。最初は明治二十九年の事で、正妻の入院中愛妾の神島みさほを引き入れた最初の夜に、伝次郎はみさほのために紙切刀で頸動脈を切断され、みさほもその現場で自殺を遂げてしまつたのだ。それから、次は六年後の明治三十五年で、未亡人になった、博士とは従妹に当る筆子夫人が寵愛の嵐鯛十郎という上方役者のためにやはり絞殺されて、鯛十郎もその場去らずに縊死を遂げてしまつた。そして、この二つの他殺事件には一向に動機と目されるものもなく、いや却つて反対の見解のみが集まるという始末なので、止むなく、衝動性の犯罪として有耶無耶のうちに葬られてしまつたのだよ。所で、主人を失つた黒死館では、一時算哲とは異母姪に當る津多子——君も知つての通り、現在では東京神恵病院院長押鐘博士の夫人になっているが、曾ては大正末期の新劇大女優さ——当時三歳に過ぎなかつたその人を主としてゐるうちに、大正四年になると、思いがけなかつた男の子が、算哲の愛妾岩間富枝に胎もつたのだ。それが即ち、現在の当主旗太郎なんだよ。そうして、無風のうちに三十何年か過ぎた去年の三月

に、三度動機不明の変死事件が起った。今度は算哲博士が自殺を遂げてしまったのだ」と云つて、側の書類綴りを手操り寄せ、著名な事件に当局から送って来る、検屍調書類の中から、博士の自殺に関する記録を探し出した。

「いいかね——」

——創は左第五第六肋骨間を貫き左心室に突入せる、正規の創形を有する短剣刺傷にして、算哲は室の中央にてその束を固く握り締め、扉を足に頭を奥の帷幕に向けて、仰臥の姿勢にて横わり。相貌には、稍々悲痛味を帯ぶと思われる痴呆状の弛緩を呈し、現場は鎧扉を閉ざせる薄明の室にして、家人は物音を聴かずと云い、事物にも取り乱されたる形跡なし、尚、上述のもの以外には外傷はなく、しかも、同人が西洋婦人人形を抱きてその室に入りてより、僅々十分足らずのうちに起れる事実なりと云う。その人形と云うは、路易朝末期の格襦袢服をつけたる等身人形にして、帷幕の蔭にある寝台上にあり、用いたる自殺用短剣は、その護符刀ならんと推定さる。のみならず、算哲の身辺事情中には、全然動機の所在不明にして、天寿の終りに近き篤学者が、如何にしてかかる愚拳を演じたるものや、その点頗る判断に苦しむ所と云うべし——。

「どうだね支倉君、第二回の変死事件から三十九年を隔てても、死因の推定が明瞭であっても動因がない——という点は、明白に共通し

ているのだ。だから、そこに潜んでいる眼に見えないものが、今度ダンネベルグ夫人に現われたとは思えないかね」

「それは、ちと空論だろう」と検事はやり込めるような語気で、「二回目の事件で、前後の聯関が完全に中断されている。何とかいう上方役者は、降矢木以外の人間じゃないか」

「そうなるかね。何処まで君には手数が掛るんだろう」と法水は眼で大袈裟な表情をしたが、「所で支倉君、最近現われた探偵小説家に、小城魚太郎という変り種がいるんだが、その人の近著に「近世迷宮事件考案」と云うのがあって、その中で有名なキューダビイ壊崩録を論じている。ヴィクトリア朝末期に栄えたキューダビイの家も、恰度降矢木の三事件と同じ形で絶滅されてしまったのだ。その最初のものは、宮廷詩文正期読師の主キューダビイが、出仕しようとした朝だった。当時不貞の噂が高かった妻のアンが、送り出しの接吻をしようとして腕を相手の肩に繞らすと、矢庭に主は短剣を引き抜いて、背後の帷幕に突き立てたのだ。所が、紅に染んで斃れたのは、長子のウォールターだったのだ。驚駭した主は、返す一撃で自分の心臓を貫いてしまった。次はそれから七年後で、次男ケントの自殺だった。友人から右頬に盃を投げられて決闘を挑まれたにも拘らず、不関気な顔をしたと云うので、それが嘲笑的となり、世評を恥じた結果だと云われている。然し、同じ運命はその二年後にも、一人取り残

された娘のジョージアにも廻つて来た。許婚者との初夜にどうした事か、相手を罵つたので、逆上されて新床の上で絞殺されてしまったのだ。それが、キューダビイの最期だったのだよ。所が小城魚太郎は、到底運命説しか通用されまいと思われるその三事件に、科学的な系統を発見した。そして、こういう断定を下している。結論は、閃光的に顔面右半側に起る、グブラー麻痺の遺伝に過ぎないという。即ち主の長子刺殺は、妻の手が右頬に触れても感覚がないので、その手が背後の帷幕の蔭にいる密夫に伸べられたのではないかと誤信した結果であつて、そうなると、次男の自殺は論ずる迄もなく、娘もやはりグブラー麻痺のために、愛撫の不満を訴えたためではないかと推断しているのだ。勿論探偵作家に有り勝ちな、得手勝手極まる空想には違いない。けれども降矢木の三事件には、少くとも聯鎖を暗示している。それに、小さな窓を切り拓いてくれたことだけは確かなんだよ。然し遺伝学というのみの狭い領域だけじゃない。あの磅礴としたものの中には、必ず想像も附かぬ怖ろしいものがあるに違いないのだ」

「フム、相続者が殺されたというのなら、話になるがね。然し、ダンネベルグじゃ……」と一旦検事は小首を傾げたけれども、「所で、今の調書にある人形と云うのは」と問い返した。「それが、テレーズ夫人の記憶像さ。博士がコペッキイ一家(ボヘミアの名操人形工)に作ら

せたとかいう等身の自動人形だそう。然し、何より不可解なのは、四重奏団の四人なんだよ。算哲博士が乳呑児のうちに海外から連れて来て、四十余年の間館から外の空気を、一度も吸わせた事がないと云うのだからね」

「ウン、少数の批評家だけが、年一回の演奏会で顔を見ると云うじゃないか」

「そうなんだ。屹度薄気味悪い蠟色の皮膚をしてるだろう」と法水も眼を据えて、「然し、何故に博士が、あの四人に奇怪な生活を送らせたのだろうか、また、四人がどうしてそれに黙従していたのだろう。所がね、日本の内地では唯それを不思議がるのみの事で、一向突込んだ調査をした者がなかったのだが、偶然四人の出生地から身分まで調べ上げた好事家を、僕は合衆国で発見したのだ。恐らくこれが、あの四人に関する唯一の資料と云ってもいいだろうと思うよ」そして取り上げたのは、一九〇一年二月号の「ハートフォード福音伝導者」誌で、それが卓上に残った最後だった。「読んでみよう。著者はフarrowという人で、教会音楽の部にある記述なんだが」

——所もあろうに日本に於いて、純中世風の神秘樂人が現存しつつあると云う事は、恐らく稀中の奇とも云うべきであろう。音楽史を辿ってさえも、その昔シュウツインゲンシュウツインゲンの城苑に於いて、マンハイム選挙侯カアル・テオドルが、仮面をつけた六人の樂師を養成し

たと云う一事に尽きている。此処に於いて予は、その興味ある風説に心惹かれ、種々策を廻らして調査を試みた結果、漸く四人の身分のみを知る事が出来た。即ち、第一提琴奏者のグレート・ダンネベルグは、塊太利チロル県マリエンベルグ村狩猟区監長ウルリッヒの三女。第二提琴奏者ガリバルド・セレナは伊太利布林デッシー市鑄金家ガリカリニの六女。ヴィオラ奏者オリガ・クリヴオフは露西亜コルカサス州タガンツシースク村地主ムルゴジの四女。チェロ奏者オットカール・レヴエズは洪牙利コンタルツァ町医師ハドナツクの二男。何れも各地名門の出である。然し、その集團の所有者降矢木算哲博士が、果してカアル・テオドルの、豪奢なロココ趣味を学んだものであるかどうか、その点は全然不明であると云わねばならない。

法水の降矢木家に関する資料は、これで尽きているのだが、その複雑極まる内容は、却って検事の頭脳を混乱せしむるのみの事であった。然し、彼が恐怖の色を泛べ口誦んだところの、ウィチダス呪法典という一語のみは、さながら夢の中で見る白い花のように、何時までもジインと網膜の上にとどまっていた。また一方法水にも、彼の行手に当って、殺人史上空前ともいう異様な死体が横わっているとは、その時どうして予知する事が出来たであろうか。

第一篇 死体と二つの扉を繞つて

1 栄光の奇蹟

私鉄T線も終点になると、其処はもう神奈川県になっている。そして、黒死館を展望する丘陵までの間は、煙の防風林や竹林が続いていて、とにかく其処までは、他奇のない北相模の風物であるけれども、一旦丘の上に来てしまうと、俯瞰した風景が全然風趣を異にしてしまうのだ。恰度それは、マクベスの所領クオーダーのあった——北部蘇格蘭スコットランドそっくりだと云えよう。そこには木も草もなく、そこまで来るうちには、海の潮風にも水分が尽きてしまつて、湿り気のない土の表面が灰色に風化していて、それが岩塩のように見え、凸凹した緩斜の底に真黒な湖水があるやうと云う——それにさも似た荒涼たる風物が、摺鉢の底にある牆壁かべまで続いている。その赭土褐砂の因をなしたと云うのは、建設当時移植したと云われる高緯度の植物が、瞬く間に死滅してしまつたからであつた。けれども、正門までは手入れの行届いた自動車路が作られていて、破牆挺崩しと云われる切り取り壁が出張った主楼の下には、薔と葡萄の葉文が鉄扉を作っていた。その日は前夜の疎雨の後をうけて、厚い層をなした雲が低く垂れ下り、それに、気圧の変調からでもあろうか、妙に人肌めいた生

暖かきで、時折微かに電光が瞬き、口小言のような雷鳴が鈍く懾気に轟いて来る。そういう暗惨たる空模様の中で、黒死館の巨大な二層楼は——わけても中央にある礼拝堂の尖塔や左右の塔櫓が、一刷毛刷いた薄墨色の中に塗抹されていて、全体が樹脂っぽい単色画を作っていた。

法水は正門際で車を停めて、そこから前庭の中を歩き始めた。壁廊の背後には、薔薇を絡ませた低い赤格子の塀があって、その後が幾何学的な構図で配置された、ル・ノートル式の花苑になっていた。花苑の縦横に貫いている散歩路の所々には、列柱式の小亭や水神やサイキ或は滑稽な動物の像が置かれてあって、赤煉瓦を斜めに並べた中央の大路を、碧色の釉瓦で縁取りしている所は、所謂矢筈敷と云うのである。そして、本館は水松の刈込垣で繞らされ、壁廊の四周には、様々の動物の形や頭文字を雛状に刈り込んだ、桐や糸杉の象徴樹が並んでいた。尚、刈込垣の前方には、バルナス群像の噴泉があって、法水が近附くと、突如奇妙な音響を發して水煙を上げ始めた。

「支倉君、これが驚駭噴泉と云うのだよ。あの音も、また弾丸のように水を浴びせるのも、みんな水圧を利用しているのだ」と法水は飛沫を避けながら、何気なしに云ったけれども、検事はこのバロック風の弄技物から、何となく薄気味悪い予感を覚えずにいらなかった。

それから法水は、刈込垣の前に立って本館を眺め始めた。長い矩形に作られている本館の中

央は、半円形に突出していて、左右に二条の張出間があり、その部分の外壁だけは、薔薇色の小さな切石を泥膠で固め、九世紀風の粗朴な前羅馬様式をなしていた。勿論その部分は礼拝堂に違いなかった。けれども、張出間の窓には、薔薇形窓がアーチ形の格子の中に嵌っているのだし、中央の壁面にも、十二宮を描いた彩色硝子の円華窓のある所を見ると、これ等様式の矛盾が、恐らく法水の興味を惹いた事と思われた。然し、それ以外の部分は、玄武岩の切石積で、窓は高さ十尺もあるという二段鎧扉になっていた。玄関は礼拝堂の左手にあって、もしその打戸環のついた大扉の際に私服さえ見なかったならば、恐らく法水の夢のような考証癖は、何時までも醒めなかったに違いない。けれども、その間でも、検事が絶えず法水の神経をビリビリ感じていたと云うのは、鐘楼らしい中央の高塔から始めて、奇妙な形の屋窓や煙突が林立している辺りから、左右の塔櫓にかけて、急峻な屋根を一渉り観察した後に、その視線を下げて、今度は壁面に向けた顔を何度となく顎を上下させ、そういう態度を数回に涉って繰り返したからであって、その様子が何となく、算数的に比較検討しているもののように思われたからだった。果せる哉、この予測は的中した。

最初から死体を見ぬにも拘らず、はや法水は、この館の雰囲気を探索って、その中から結晶のようなものを摘出して行ったのであった。

玄関の突当りが広間になっていて、其処に控

えていた老人の召使が先に立ち、右手の大階段室に導いた。その床には、リラと暗紅色の七宝模様を切嵌を作っていて、それと、天井に近い円廊を廻っている壁面との対照が、中間に無装飾の壁があるだけ一層引き立って、まさに形容を絶した色彩を作っていた。馬蹄形に両肢を張った階段を上り切ると、そこは所謂階段廊になっていて、そこから今来た上空に、もう一つ短い階段が伸び、階上に達している。階段廊の三方の壁には、壁面の遙か上方に、中央のカプリエル・マックス作「腑分図」を挟んで、左手の壁にジェラルド・ダビッドの「シサムネス皮剣死刑の図」、右手の壁面には、ド・トリリーの「一七二〇年マルセーユの黒死病」が、掲げられてあった。何れも、縦七尺幅十尺以上に拡大模写した複製画であって、何故斯かる陰惨なもののみを選んだのか、その意図が頗る疑問に思われるのだった。然し、そこで法水の眼が素早く飛びついたと云うのは「腑分図」の前方に正面を張って並んでいる、二基の中世甲冑武者だった。何れも手に旌旗の旒棒を握っていて、尖頭から垂れている二様の綴織が、画面の上方で密着していた。その右手のものは、クエーカー宗徒の服装をした英蘭土地主が所領地図を掲げ、手に図面の英町尺を持っている構図であって、左手のものには、羅馬教会の弥撒が描かれてあった。その二つとも、上流家庭にはありきたりな、富貴と信仰の表徴に過ぎないものであるから、恐らく法水は看過すると思いの外、却って召使を招き

寄せて訊ねた。

「この甲冑武者は、いつも此処にあるのかね」
 「どう致しまして、昨夜からでございます。七時前には階段の両裾に置いてありましたが、八時過ぎには此処まで飛び上って居りました。一体、誰が致しましたものか？」

「そうだろう。モンテン侯爵夫人のクラニー荘を見れば判る。階段の両裾に置くのが定法だからね」と法水はアッサリ領いて、それから検事に、「支倉君、試しに持ち上げて見給え。どうだね、割合軽いだろう。勿論実用になるものじゃないさ。甲冑も、十六世紀以来のものは全然装飾物なんだよ、それも、路易朝に入ると肉彫の技巧が繊細になって、厚みが要求され、終いには、着ては歩けない程の重さになってしまったものだ。だから、重量から考えると、無論ナテルロ以前、さあ、マッサダリアかサンヴィノ辺りの作品かな」

「オヤオヤ、君は何時ファイロ・ブンスになったのだね。一口で云えるだろう——抱えて上れぬ程の重量ではないって」と検事は痛烈な皮肉を浴せてから、「然し、この甲冑武者が、階下にあつてはならなかったのか。それとも、階上に必要だったのだろうか？」

「無論、此処に必要だったのさ。とにかく、三つの画を見給え。疫病・刑罰・解剖だろう。それに、犯人がもう一つ加えたものがある——それが、殺人なんだよ」

「冗談じゃない」検事が思わず眼を瞪ると、法

水もやや興奮を交えた声で云った。

「取りも直さず、これが今度の降矢木事件の象徴という訳さ。犯人はこの大扉を掲げて、陰微のうちに殺戮を宣言している。或は、僕等に対する、挑戦の意志かも知れないよ。大体支倉君、二つの甲冑武者が、右のは右手に、左のは左手に旗旗の柄を握っているだろう。然し、階段の裾にある時を考えると、右の方は左手に、左の方は右手に持って、構図から均斉を失わないのが定法じゃないか。そうすると、現在の形は、左右を入れ違えて置いたことになるだろう。つまり、左の方から云って、富貴の英町旗——信仰の弥撒旗となっていたのが、逆になったのだから……そこに怖ろしい犯人の意志が現われて来るんだ」

「何が？」

「Mass (弥撒) と acre (英町) だよ。続けて読んで見給え。信仰と富貴が、Massacre——虐殺に化けてしまうぜ」と法水は検事が啞然としたのを見て、「だが、恐らくそれだけの意味じゃあるまい。いずれこの甲冑武者の位置から、僕はもっと形に現われたものを発見け出す積りだよ」と云ってから、今度は召使に、「所で、昨夜七時から八時までの間に、この甲冑武者に就いて目撃したものはなかったかね」

「ございません。生憎とその一時間が、私共の食事に向つて居りますので」

それから法水は、甲冑武者を一基一基解体して、その周囲は、画図と画図との間にある龜形

の壁灯から、旗旗の蔭になっている。「腑分図」の上方までも調べたけれど、一向に得る所はなかった。画面のその部分も背景の外れ近くで、様々な色の縞が雑然と配列しているに過ぎなかった。それから、階段廊を離れて、上層の階段を上って行ったが、その時何を思いついたのか、法水は突然奇異な動作を始めた。彼は中途まで来たのを再び引き返して、もと来た大階段の頂辺に立った。そして、衣囊から格子紙の手帳を取り出して、階段の階数をかぞえ、それに何やら電光形めいた線を書き入れたらしい。流石これには、検事も引き返さずにはいられなかった。

「なにあに、一寸した心理考察をやったまでの話さ」と階上の召使を憚りながら、法水は小声で検事の問いに答えた。「いづれ、僕に確信がつけいたら話す事にしますが、とにかく現在の所では、それで解釈する材料が何一つないのだからね。単にこれだけの事しか云えないと思うよ。先刻階段を上って来る時に、警察自動車らしいエンジンの爆音が玄關の方でしたじゃないか。するとその時、あの召使は、そのけたたましい音響に当然消されねばならない、或る微かな音を聴く事が出来たのだ。いいかね、支倉君、普通の状態では到底聴くことの出来ない音をだよ」

そういう甚しく矛盾した現象を、法水は如何にして知る事が出来たのだろうか？ 然し、彼はそれに附け加えて、そうは云うもの、あの召使には毫末の嫌疑もない——といって、その

姓名さえも聞こうとはしないのだから、当然結論の見当が茫漠となつてしまつて、この一事は、彼が提出した謎となつて残されてしまつた。

階段を上り切った正面には、廊下を置いて、巖畳な防塞を施した一つの室があった。鉄柵扉の後方に数層の石段があつて、その奥には、金庫扉らしい黒漆がキラキラ光っている。然し、その室が古代時計室だという事を知ると、収蔵品の驚くべき価値を知る法水には、一見莫迦氣て見える蒐集家の神祕を鎮く事が出来た。廊下はそこを基点に左右へ伸びていた。一劃毎に扉が附いているので、その間に隧道のような暗さで、昼間でも龕の電燈が点つている。左右の壁面には、泥焼の朱線が彩つているのみで、それが唯一の裝飾だった。やがて、右手にとつた突当りを左折し、それから、今来た廊下の向う側に出ると、法水の横手には短い拱廊が現われ、その列柱の蔭に並んでいるのが、和式の具足類だった。拱廊の入口は、大階段室の円天井の下にある円廊に開かれていて、その突き当りには、新しい廊下が見えた。入口の左右にある六弁形の壁燈を見やりながら、法水が拱廊の中に入ろうとした時、何を見たのか愕然としたように立ち止つた。

「此処にもある」と云つて、左側の据具足（鑑櫃の上に据えたもの）の一系列のうちで、一番手前にあるのを指差した。その黒毛三枚鹿角立の兜を頂いた緋緘綴の鎧に、何の奇異があるので

あろうか。検事は半ば呆れ顔に反問した。

「兜が取り換えられているんだ」と法水は事務的な口調で、「向う側にあるのは全部吊具足（宙吊りにしたもの）だが、二番目の滑車胴の安鎧に載っているのは、鎧を見れば判るだろう。あれは、位置の高い若武者が冠る獅子嚙台星前立脇細鍬という兜なんだ。また、此方の方は、黒毛の鹿角立と云う猛悪なものが、優雅な緋緘の上に載っている。ねえ支倉君、すべて不調なものには、邪まな意志が潜んでいるとか云うぜ」と云つてから召使にこの事を確かめると、流石に驚嘆の色を泛べて、

「ハイ、左様でございます。昨夕までは仰言つた通りでございましたが」と躊躇せずに答えた。それから、左右に幾つとなく並んでいる具足の間を通り抜けて、向うの廊下に出ると、そこは袋廊下の行き詰りになつていて、左は、本館の横手にある旋廻階段のテラスに出る扉。右へ数えて五つ目が現場の室だった。分厚な扉の両面には、古拙な野生的な構図で、耶穌が偏癡を癒やしている聖画が浮彫になつていた。その一重の奥に、グレーテ・ダンネベルグが死体となつて横わっているのだった。

扉が開くと、後向きになつた二三四がらみの婦人を前に、捜査局長の熊城が苦り切つて鉛筆の護謨を嚙んでいた。二人の顔を見ると、遅着を咎めるように、眦を尖らせたが、「法水君、仏様ならあの帷幕の蔭だよ」と如何にも無愛想に云い放つて、その婦人に対する訊問も止めて

しまつた。然し、法水の到着と同時に、早くも熊城が、自分の仕事を放棄してしまつたの云い、時折彼の表情の中に往來する、放心とでも云うような鈍い弛緩の影があるのを見ても、帷幕の蔭にある死体が、彼にどれ程の衝撃を与えたものか——さして想像に困難ではなかつたのである。

法水は、まず其処にいる婦人に注目を向けた。愛くるしい二重顎のついた丸顔で、大して美人と云う程ではないが、円らな瞳と青磁に透いて見える眼隈と、それから張り切れそうな小麦色の地肌とが、素晴らしく魅力的だった。葡萄酒色のアフタヌーンを着て、自分の方から故算哲博士の秘書紙谷伸子と名乗つて挨拶したが、その美しい声音に引きかえ、顔は恐怖に充ち土器色に變つていた。彼女が出て行つてしまつたと、法水は黙々と室内を歩き始めた。その室は広々とした割合に薄暗く、おまけに調度が少いので、ガラシとして淋しかった。床の中央には、大魚の腹中にある約拿を圖案化したエゴプト織の敷物が敷かれ、その部分の床は、色大理石と櫨の木片を交互に組んだ車輪模様の切嵌。其処を挟んで、両辺の床から壁にかけ胡桃と櫨の切組みになつていて、その所々に象眼を鏤められ、渋い中世風の色沢が放たれていた。そして、高い天井からは、木質も判らぬ程に時代の汚斑が黒く滲み出ていて、その辺から鬼氣とも云いたい陰惨な空気が、静かに澱み下つて來るのだった。扉口は今入つたのが一つしかなく、

左手には、横庭に開いた二段鏡窓が二つ、右手の壁には、降矢木家の紋章を中央に刻み込んでいる大きな壁炉が、数十個の石材で畳み上げられてあった。正面には、黒い天鵝絨の帷幕が鉛のように重く垂れ、なお屏から煖炉に寄った方の壁側には、三尺程の台の上に、裸体の偶像と有名な立法者（埃及彫像）の彫像とが背中合わせをしていて、窓際寄りの一劃は高い衝立で仕切られ、その内側に、長椅子と二三脚の椅子、卓子が置かれてあった。隅の方へ行って人群から遠ざかると、古くさい徽の匂がブーンと鼻孔を衝いて来る。煖炉棚の上には埃が五分ほども積っていて、帷幕に触れると、咽っぽい微粉が天鵝絨の織り目から飛び出して来て、それが銀色に輝き、飛沫のように降り下って来るのだった。一見して、この室が永年の間使われていない事が判った。やがて、法水は帷幕を揺分けて内部を覗き込んだが、その瞬間凡ゆる表情が静止してしまつて、これも背後から、反射的に彼の肩を掴んだ検事の手があったのも知らず、またそれから波打つような顫動が伝わってくるのも感ぜずに、ひたすら耳が鳴り顔が火の様に熾つて、彼の眼前にある驚くべきもの以外の世界が、すうっと何処かへ飛び去って行くかのように思われた。

見よ！ そこに横わっているダンネベルグ夫人の死体からは、聖らかな栄光が燦然と放たれているのだ。恰度光の霧に包まれたように、表面から一寸ばかりの空間に、澄んだ青白い光

が流れ、それが全身をしつくりと包んで、陰闇の中から朦朧と浮き出させている。その光には、冷たい清冽な敬虔な気品があつて、また、それに量とした乳白色の濁りがある所は、奥底知れない神性の啓示でもあろうか。醜い死面の陰影は、それがために端正な相に軟げられ、実に何とも云えない静穏なムードが、全身を覆うているのだ。その夢幻的な、莊嚴なものの中からは、天使の吹く喇叭の音が聴えて来るかも知れない。今にも、聖鐘の股々たる響が轟き始め、その神々しい光が、今度は金線と化して放射されるのではないかと思われて来ると、——ああ、ダンネベルグ夫人はその童貞を讀えられ、最後の恍惚境に於いて、聖女として迎えられたのであるうかと、知らず知らず洩れ出て来る嘆声を、果てはどうする事も出来なくなつてしまふのだった。然し、同時にその光は、其処に立ち列んでいる、阿呆のような三つの顔も照らしていた。法水も漸く吾にかえつて調査を始めたが、鎧窓を開くと、その光は薄らいで殆ど見えなかった。死体の全身はコチコチに硬直して、既に死後十時間は十分経過しているものと思われたが、流石法水は動ぜずに、飽く迄科学的批判を忘れなかった。彼は口腔内にも光があるのを確かめてから、死体を俯向け、背に現われている鮮紅色の屍斑を目がけ、グサリと小刀の刃を入れた。そして、死体をやや斜にすると、ドロリと重たげに流れ出した血液で、忽ち屍光に暈と赤らんだ壁が作られ、それがまる

で、割れた霧のように二つに隔てられて行き、その隙間に、ノタリノタリと血が蜿蜒くって行く影が印されて行つた。検事も熊城も、到底この凄惨な光景を直視する事は出来なかった。

「血液には光はない」と法水は死体から手を離すと、無然として呟いた。「今の所では、何と云つても奇蹟と云うより外にないだろうね。外部から放たれているものでない事は、とうに明らかなんだし、隣の臭気はないし、ラジウム化合物なら皮膚に壞疽が出来るし、着衣にもそんな跡はない。正しく皮膚から放たれているんだ。そして、この光には熱も匂もない。所謂冷光なんだよ」

「すると、これでも毒殺と云えるのか？」と検事が法水に云うのを、熊城が受けて、

「ウン、血の色や屍斑を見れば判るぜ。明白な青酸中毒なんだ。だが法水君、この奇妙な文身の様な創紋はどうして作られたのだろうか？これこそ、奇を嗜み変異に耽溺する、君の領域じゃないか」と剛愎な彼に似げない自嘲めいた笑を洩らすのだった。

実に、怪奇な栄光に続いて、法水を睥目せしめた死体現象がもう一つあったのだ。ダンネベルグ夫人が横わっている寝台は、帷幕のすぐ内側にあって、それは、松毬形の頂花を頭飾にし、その柱の上に、レースの天蓋をつけた路易朝風の桃花木作りだった。死体は、その殆ど右外れに俯臥の姿勢で横わり、右手は、背の方へ捻じ曲げたように甲を臂のうえに置き、左手は